伝道者の書
この書は知恵の書の 1 つであり
次のような 1 節で始まります エルサレムの王ダビデの子
コヘレトの言葉コヘレトとはヘブル語で人々を
集めた者という意味ですが ここでは教えるために集めることを
指していて伝道者と訳されています
そしてこの伝道者はダビデの子または子孫
と言われているのでこれが誰かということについては
いくつかの説があります ソロモン王だという説がありますし
それより後のダビデの血筋の王
だとも言われています またこれは後の時代のイスラエル
の教師であり彼がソロモン王を演じながら
教訓を述べていると考える人もいます
どの説が正しいとしても重要なのは伝道者はこの書の登場人物
であり匿名を貫いている著者とは別人
だということです つまりこの書の大部分は伝道者
の言葉なのですが彼を紹介する冒頭の文と巻末で
伝道者の言葉を要約し評論しているのは別の人物なの
です この著者は読者に伝道者の言葉
をすべて聞かせたうえでその理解を助け読者自身の結論
を出させようとしています では伝道者は何を伝えたいのでしょうか
著者はその基本的なメッセージを一番最初と最後でまとめています
ヘベルヘベルすべてはヘベル日本語の聖書は
このヘベルを空あるいはむなしいと訳しています
しかしそれはこの言葉の核心そのものとは言えません
ヘブル語のヘベルとは蒸気とか煙のことです
伝道者は人生がどのようなものかを表す比喩として
この言葉を 38 回も使っています すなわち人生は煙のように束の間
のものではかなく消えるのです
そして謎と矛盾に満ちているということです
煙のように確かにそこにあるのにつかもうとしてもつかめません
例えばこの世には美しいもの良いものはたくさんありますが
それを楽しんでいる最中に悲劇が起きると
すべては吹き飛んでしまいます また人は正義を信じていますが
往々にして良い人々に悪いことが起こります
人生とは予想がつかず安定せず伝道者の言葉を借りれば

風を追うようなものつまりヘベルなのです
なんだか気が滅入るような話です彼はなぜこんなことを書いたの
でしょうか 著者の狙いは
神を抜きにして人生の意味や目的を見出そうとしている
人々の価値観を伝道者によって打ち壊すことです
著者の考えでは彼らは究極的には意味のないどうでもいいことに
多くの時間やエネルギーを費やし一喜一憂しています
そこで伝道者を通して厳しい現実を突きつけたのです
それが顕著に表れているのが最初と最後の詩です
これは時間と死をテーマにしています 伝道者は言いますあなたは人生の
すべてを仕事に費やすそれが人生を意味あるものにする
と思っているからだ立ち止まり時の流れについて考えよ
人間は昔からたゆまぬ努力をして
きましたがこの世界は本質的にはまったく
変わりません もちろん技術は進歩し国々を発展
させてきました しかし山々に目を向けてみましょう
その山ははるか昔から存在し 人々が必死に働くのを静かに見
守ってきました たとえば 100 年後に
あなたのことやあなたがしたことを思い出す人がいるでしょうか
けれどもこの山は 100 年後もそこにあり海は変わらず波を立て
太陽は登ったり沈んだりしているでしょう
時は私やあなたそして私たちが大事にしている
すべてのことを消し去っていきます
伝道者はさらに厳しい現実を語り追い打ちをかけます
この書全体を通して何度も死を語っていますが
特に最後のほうでこう言うのです 死は人を平等にするすべての人
がなしたわざを無意味にする 賢い者も愚かな者も富める者も
貧しい者も必ず死ぬ あなたが誰であれ何をなしたに
せよ良い者も悪い者もみんな死ぬ誰も逃れられない
伝道者はこの二つの前提に立って財産やキャリア社会的地位
快楽などに人生の意味を見出そうとする偽りの希望について
語っているのです あなたは働けば働くほど良い人生を
送れると思いますか そこにはストレスや犠牲があり
不安で眠れない日々もあるでしょう そして富を得る頃にはそれを楽しむ
若さは失われているのです しかもその富を受け継ぐ人は
あなたの業績なんてまったく気に留めないかもしれません

それともあなたは楽しみこそ人生を豊かにすると思いますか
では大いに楽しみなさい休暇を豪華に楽しんでも
週末にはじけても日常は必ず戻ってきます
ヘベル（空）ヘベル（空）すべてはまさにヘベル（空）です
では伝道者は快楽主義者になれあるいは
自分の信じた道を行けと主張しているのでしょうか
いいえそれらもまたヘベルです　伝道者は箴言の思想を受け継いで
いて知恵によって生き主を恐れることに価値があると
信じています　そうすれば人生はおおむねうまくいく
ことでしょう　ところが厄介なことに
知恵と主の恐れをもって生きることはなおヘベルだというのです
なぜかといえばそれが素晴らしい人生を保証して
くれるわけではないからです　善人が悲劇的な死を遂げ悪人が
長生きし栄えるそんな例は残念ながらいくらでも
あります　とすれば知恵さえヘベルです
それは意味がないわけではなく謎なのです
知恵が人生を思い通りにしてくれる訳ではないのですから
ではこのヘベルのただなかをどう生きればいいのでしょうか
伝道者は真の喜びがある人生のカギを逆説的なところに見出します
それはヘベルを受け入れることです
自分が人生におけるすべてのことを
全くコントロールできないと認めることです
伝道者は 6 回ほど特に悲観的なことを語っている最中に
神からの贈り物について語ります　それは友情　家族　おいしい食事
快晴の日など人生に素朴な喜びを与えてくれるものです
それは自力で得られるものではな
く得られる保証もないものですがだからこそ美しいのです
もし全面的に神に信頼することができるなら
こうあるべきだと思う人生ではなく
あるがままの人生を楽しめることでしょう
なぜなら人生とはこうあるべきと考えることさえも
ヘベルヘベル世のすべてのものはヘベル
こうして伝道者の言葉は終わります
最後の部分では著者が再び口を開き結論を述べます
彼は伝道者の言葉はとても重要であるとしそれを
羊飼いが羊を追うのに使う突き棒に例えています

それで突かれれば痛いでしょうが
伝道者はあなたが優れた知恵という正しい方向に歩き出すように
突き棒を使うのだと著者は言います　著者はまた
私たちが哲学的な問いの答えを求めて本に埋もれることについて
答えは出ないからやめなさいと警告しています
代わりに彼が提示した答えは神を恐れ神の命令を守れ
それが人間にとってすべてであり神は隠された善も悪もみな裁く
ということでしたというわけで読者が空しい望み
を捨て時と死のために人生は思いどおりにならないと
伝道者から学ぶことを著者は勧めます
人生に真の意味を与えてくれるのは
神の裁きがいつの日かヘベルを拭い去り
真の正義をもたらしてくださる　という希望です
この希望のゆえ謎だらけのこの世界のあり様にかかわらず
神の前に正直に誠実に生きる知恵をこの書は教えます
これが伝道者の書です

500 字の要約
『伝道者の書』は知恵の書の一つで、エルサレムの王ダビデの子であるコヘレト（伝道者）の言葉から始まります。伝道者は匿名の著者とは別の人物であり、この書の大部分は伝道者の言葉です。伝道者は、人生を「ヘベル」と表現し、それは煙や蒸気のように一瞬のものであり、謎と矛盾に満ちていると語ります。
著者の狙いは、神を無視し、人生の意味を他の要素で見つけようとする人々の価値観を揺さぶることです。彼らはついには意味のないことに多くの時間とエネルギーを費やし、一喜一憂していると伝道者は指摘します。
伝道者は、知恵によって生きることが価値があると信じていますが、それでもそれが人生を完全にコントロールできるものではないと認識します。最終的に、真の喜びを見つける鍵は、ヘベル（空しさ）を受け入れることであり、自分がコントロールできないことを認めることです。
伝道者は、神からの贈り物、友情、家族、おいしい食事、快晴の日など、人生の喜びを強調し、それらは自力で得られるものではなく、保証もないものであるため、その美しさが際立つと説明します。
最終的に、著者は伝道者の言葉を大切にし、それを知恵に導かれた方向に歩くための指針として提示します。彼は哲学的な問いに答える本に埋もれることは無駄であり、神を恐れ、神の命令を守ることが真の意味を見つける道であると教えます。この希望により、神の裁きがいつかヘベルを払拭し、真の正義をもたらすことを待ち望み

ます。『伝道者の書』は、この希望を通じて、神の前で誠実に生きる知恵を教える書物です。